慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 国道16号線が映し出すものは? : 塚田修一・ 西田善行編著『国道16号線スタディーズ : 2000年代の郊外とロードサイドを読む』青弓社、2018年
Sub Title	
Author	小谷, 敏(Kotani, Satoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.166- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評： 国道 16 号線が映し出すものは？

塚田修一・西田善行編著『国道 16 号線スタディーズ
――2000 年代の郊外とロードサイドを読む』
青弓社、2018 年

小谷　敏

１.「もの」への注目――「ロード社会学」の試み

神奈川県横須賀市から、千葉県富津市に至る環状道路である国道１６号線。無機的な風景を特徴とする 16 号線のロードサイドは、これまで郊外の典型として語られてきた。「16 号的なるもの」は表現者たちの想像力を刺激し、ここを舞台とする小説、マンガ、映画、テレビドラマ、ドキュメンタリー等々の作品が、数多く生み出されてきた。本書は８名の著者たちが１６号線を自動車で駆け抜け、時には道路沿いを歩いて書き上げた、ロードムービーならぬ「ロード社会学」の試みである。

本書の構成は以下のとおりである。序章において全体の見取り図が示された後、第１章では 16 号線を取り上げた二つのテレビ番組が俎上に乗せられる。第２章では１６号線の沿線に林立する送電用の鉄塔が取り上げられ、第３章では１６号線を走るトラックのドライバーたちのインタビューが行われている。第４章では、１６号線「らしくない」歴史の「重ね描き」を感じさせる横須賀－横浜間が論じられ、第５章ではいかにも１６号線「らしい」、歴史を欠落させたかのような相模原が語られている。第６章では「狭山」の地名にまつわる混線が語られ、第７章では１６号線との関わりにおいて、春日部市の盛衰が論じられている。第８章では 16 号線沿道の巨大霊園が、そして第９章では「木更津キャッツアイ」と重ね合わせながら、木更津中心部の商店街の歴史が語られている。終章は、１６号線沿道地域のデータ集の役割を担っている。

著者たちはかつて、『失われざる１０年の記憶』という注目すべき１９９０年代を公刊している。「失われた１０年」と呼ばれる１９９０年代は、実は想像力に富んだ、様々な表現を生み出した文化的豊饒の時代であったことを明らかにした名著である。本書には、その続編としての性格がある。著者たちは、国道１６号線に映し出された、ポスト９０年代の日本の社会と文化の像を描き出そうと試みている。そこで著者たちが注目するのが、路上と沿道に存在する様々な「もの」である。

２.「気楽さ」と「禍々しさ」――「非場所」の両義性

大型トラック、鉄塔、巨大霊園。なぜ無機的で不気味な印象すら与えるこれらの「もの」が、１６号線とその沿道に集中しているのか。それは、１６号線が東京圏の外延を走る道路である

小谷敏「書評：塚田修一・西田善行編著『国道 16 号線スタディーズ――2000 年代の郊外とロードサイドを読む』」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）166-169 頁

からである。莫大な人口を抱えた東京は夥しい物資を必要としている。それを運搬するために大型トラックは不可欠のものである。地方で作られた電気を東京に送り込む中継施設としての鉄塔が、郊外を走る16号線の沿道に多く設置されている。人は必ず死ぬ。都心には死者を埋葬する余地はない。こうして「郊外の郊外」である１６号線の沿道には、「死者たちの家」である霊園が造られることになる。１６号線を特徴づける「もの」の分析を精緻に行うことによって、この国道に「無機的」、「画一的」等のイメージがまとわりつく理由を、著者たちは明快に説明している。

著者たちはまた、１６号線沿道の歴史についても詳細な記述を行っている。１６号線の沿道には、戦前から戦中にかけて、帝都防衛のために数多くの軍事施設が配備されてきた。１６号線の起点である横須賀と、終点に近い木更津はともに海軍の町である。大戦の末期には、神奈川県の相模原を「軍都」、陸軍の航空部隊が所在する狭山を「空都」とする構想が持たれていた。しかし敗戦によって、両構想は頓挫する。「軍都」たりうる大都市を築こうとしたが果たせず、そのまま投げ出されてしまったのである。それが災いして、相模原市も狭山市とその周辺の地域も、未だに明確な都市構造とアイデンティテを築けていない。政令指定都市でありながら、相模原市には確たる中心がない。青木淳の小説がユーモラスに描き出したように、埼玉県の狭山市は隣接する入間市との間に奇妙なねじれを抱えている。狭山市は「入間村」として出発しており、逆に入間市には多くの「狭山」という地名が存在しているのだ。

郊外は固有の歴史をもたない「非場所」である。郊外の極致とも呼ぶべき１６号線の沿道では、「非場所」性が一層際立ってくる。それは都市としての堕落形態であると同時に、人々が肩の力を抜いて生きることを可能にする気楽な場所ともなりうる。若者たちの間に「ジモト」愛が高まっている一つの理由であろう。だが「非場所」には負の側面もある。１６号線の沿道には、鉄塔や霊園等、本来は包み隠されているはずのものがむき出しになっている。そうした空間の中では、人間のもつ暗い衝動もまたむき出しになるのではないか。１６号線沿いの中学校は荒れるという定評がある。暴走族は長らく相模原の名物であったし、津久井やまゆり園の惨劇のような禍々しい事件も起こっている。著者たちは、「気楽さ」と「禍々しさ」という16号線的郊外のもつ両義性を、「もの」とポピュラー文化のなかに示された表象の分析を通して、見事に浮かび上がらせている。

３.「住民抜きの地域社会論」[1)]の限界――相模原市民が抱いた疑問

著者たちの文章は、学術書でありながら非常に平明で読みやすい。そして視覚的なイメージを喚起する力をもっている。読者はあたかも自動車に乗って１６号線をドライブしているようかのような感覚を味わいながら、楽しく本書を読み進めることができるであろう。しかし読み終えた後、評者にはいくつかの疑問も残った。それについてここでは述べてみたい。

著者たちは、国道１６号線を「戦後日本のOS（評者註・オペレーションソフト）」（１９頁）と呼んでいる。道路は「ソフト」ではなく「ハード」である。道路や鉄道は、地域の産業に重

大な影響を及ぼすが、権力構造や文化的伝統等の「上部構造」をも決定づけるものではない。百歩譲って１６号線が「OS」であると認めたとしても、それに近接して走る小田急線や横浜線は一体何なのだという疑問が残る[2)]

先にみたように本書の特徴は、16 号線を象徴する「もの」に照準を当てて分析を進めている点にある。ポピュラー文化のなかで示された 16 号線の表象についても多くの言及が成されている。しかし沿道の住民の声は一切登場しない。（トラックのドライバーは「住民」ではない可能性が高い）。本書は「住民抜きの地域社会論」である。

相模原南部の「住民」である評者にとって、この地域についての本書の記述は、いくつかの疑問符がつくものであった。相模大野の街で「アメリカ軍基地」は、見えにくくなっており「埋没している」（１２８頁）という記述がある。相模大野に越してきた時に、評者がまず驚いたのが、厚木基地に離発着する米軍機の爆音である。相模大野において、アメリカ軍基地は「埋没」などしていない。この街の「住民」は、生活に支障をきたすほどの爆音に晒されることによって、日々アメリカ軍基地の実在を感じなとりながら暮らしている。

さきにもみたとおり、著者たちは、横須賀―横浜間を１６号線の中では例外的に、「歴史が重ね描き」（９５頁）されている区間と呼び、その対極にあるものとして相模原を位置付けていた。しかし一人の住民として、少しでも地域と関われば、この街においては、「地主さん」と呼ばれる、軍都計画以前からの旧住民の中の有力者が、強い影響力を保っていることが体感されるはずだ。相模原南部においても、歴史は「重ね描き」されている。

相模原以外の地域の記述については、評者が大きな疑問を抱く部分はなかった。しかし、それぞれの地域の「住民」が読めば、様々な異論や疑問が提出される可能性は否定できない。「住民なき地域社会論」には、やはり限界がある。

４.「再帰性」と「衰退」――国道１６号線が映し出すもの

それでは１６号線に映し出されたポスト９０年代の日本の文化と社会はどのようなものだったのだろうか。評者はかつて、９０年代文化を「過剰な想像力」ということばで特徴づけた[3)]。本書を読了した後、評者の脳裏に浮かんだのは、「再帰性」と「衰退」ということばであった。

１９９０年代に郊外の極致としての１６号線に、学者やマーケッター、そして文学者たちが注目するようになった。当初は主に専門家たちの間で流布していた１６号線の表象も、テレビのバラエティ番組で取り上げられ、マツコ・デラックスのような著名人がそれについて語ることによって、一般に定着した。いまや「１６号ブーム」と呼んで過言でない状況が生じている。そして、この現象に注目した研究者たちが本書を刊行した。このプロセスは、まさに再帰的過程である。

春日部市は人口減少に転じ、「木更津キャッツアイ」の舞台となった木更津の商店街は、壊滅状態に陥っている。伊勢丹相模原店の撤退がきまり、相模大野駅前の再開発ビルも不振を極めている。商業集積地としての相模原南部も、行き詰まりつつある。東京の外延部にある国道 16

号線沿いの諸都市においてこの有様である。いわんや日本の地方においておや。国道 16 号線が映し出したのは、東京の都心部にすべてが集中し、他のすべての地域が衰退していく、ポスト９０年代のこの国の姿である。この衰退を止める手立てはないのか。それを考えるのが社会学者の仕事ではないのか。本書を読み終えたいま、評者はその思いを強くしている。

【註】

1) ２０１９年２月に開かれた本書の書評会での、著者の一人の発言。

2) 同じ書評会であるコメンテーターが、これと類似の発言をしていた。

3) 小谷敏　２０１３　書評：「過剰な想像力の時代：鈴木智之・西田善行編著『失われざる十年の記憶』(青弓社、2012 年)を読む」三田社会学１８号　１６６－７０頁

（こたに　さとし　大妻女子大学）